

あるいは婦人会の民謡参加をみこすと、当日は延べ一千名に近い出場者が、かわるがわる山頂のグラウンドを賑わし、体育祭にふさわしい町民の親善大会が展開されるのである。

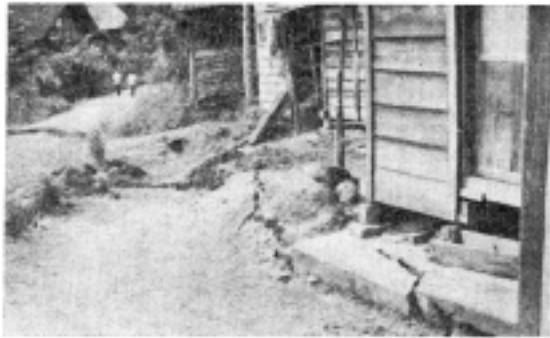
この一千名の出場にこたえる大会役員も、関係機関職員の代表七〇名、競技役員に一四〇名を委嘱し、文字通り、全町挙げての祭典として文化の日を意義あらしめることである。

昭和三十九年六月号より

十六日午後一時三分  
真昼の恐怖・地震

事務所では、午後の執務のペンをとりに上げ、田草取りの農家では、食後の午睡のひとときに、うとうととしたその瞬間、ごおーッという妖しい地鳴りと共に、グラグラッと床が動き出し机の上の花びんや、電灯や神棚の御灯明が、一斉に奇妙な踊りをはじめた。

今回の地震は、既にテレビやラジオで報道のように本県一帯、特に新潟市がその中心で、日本海沿岸では未曾有の激震ということであるが、本稿を、緊急記事としてペンをとった十六日夕刻までには、町内の被害の状況の詳細な調査はまだ



揃っていないが、心配された老朽三小学校も一応倒潰を免れ、児童職員共に無事。電話連絡が入り、町長教育長が、あわただしい中にもほっとした表情を見せられているところであった。

役場、農協、森林組合、いずれも諸方の壁が剥げ落ち、広田商店街は、陳列棚の商品がころがり、散乱して、ビン詰類、瀬戸物類の破損が随所に見られていたが、一般民家の被害も、予想以上に大きいことが感じられる。

公民館では、ここに紙上をかりて、被害の少なからんこと、また、その復旧の一日も早からんことをお祈り申し上げる次第です。

昭和四三年八月号より

南北新校舎始まる  
喜び勇んで登校の子供達

南北両小学校がいよいよ開校され、児童らが嬉々として登校しています。

待望の新校舎は、さる七月二十六日、県建築課の検査、越えて二十九、三十日には県教育委員会の検査を終わり、八月一日付をもって、町教育委員会へ管理が委託され、名実共に、南北両小学校の発足になったものです。

この開校にさきがけて、七月二十五日には、旧三校舎でそれぞれ閉校の行事があり、お別れのパーティーなどがひらかれました。

そして、八月一日には南小学校、二日には北小学校と一般町民への校舎公開が行なわれましたが、この日を待っていた町民は、我も我もと学校へ足を運び、両校舎とも、それぞれ三〇〇人を越える参観者がありました。

第二一〇号のあとがき

はじめには「館報」のちには「北条新聞」の呼び名で親しんでいたが、これでおしまい

とはさびしいことです。

いまの中学校寄宿舎が、その頃は公民館で、そこで初代主事の小暮善栄氏が本紙の前身、館報「北条」を編集していました頃、木村クニさんこと通称寮の小暮さんが、よくこんなことを話しておりました。

「小暮さんが館報を始めると、気配で私にもわかつたものです。人が変わったように、神経をイライラさせていましたから」

創刊以来、回を重ねて百二十号、出来不出来は別として、編集担当者としてはみんな精一杯の努力で、ここまでやつてきました。

はじめは館報、のちには町報と、発行の主体は変わりましたが、終始公民館事務局が編集を担当してきています。

まだまだやりようもあつたでしょうが、ご期待に添えられぬままに終刊となりました。それも、今となつては線り言です。

では、さようなら、ごきげんよろしう。こんどは、「広報かしわざき」がお手許に届くでしょう。

この記念号掲載のために笠井尚様、間島憲一様より貴重な資料を借用いたしました。ありがとうございます。

五十年前(当時)に想つ

小島 小暮 善栄

今から五十年前は昭和二十七年になります。

私が役場へお世話になったのはこの年の五月です。たまたま昭和二十五年に社会教育法が整備され市町村に公民館の設置がほぼ義務づけられたようです。

当時、刈羽郡内には二十四カ町村もありましたが、専任職員を置かない村も数多くありました。

公民館は社会教育の施設でありまして、北条の場合「中学校寄宿舎」に併設の形でスタートしたわけです。

ところが「社会教育」などとは縁もなく、何の知識も技術もない私には苦痛と手探りの毎日でした。

やがて一年経ち、二年経つ中に自分自身も勉強もし、文部省や県の研修、講習会にも積極的に受講もしました。そして、私なりにどんな立派な計画も事業も、まず人が集まらないことには「ダメ」だ。それには高望みせず足元から村人の多くにつながりをもち、楽しみ喜んでもらえる活動から始めたわけです。